

国際比較地域分析の方法と課題

—社会変動論をめぐる諸論に関する一考察—

太田 ^{ありこ}有子*

I. はじめに

現在我々が置かれている時代状況を俯瞰すると、近年国民国家への問い直しや国家システムの再編が余儀なくされている状況があるのは周知のとおりである。世界諸地域における民族紛争や部族間の対立、地域共同体や市民団体のグローバルなネットワーク化は、既存の政治体制とは別の動きを模索する試みとして、その活動の多くが国家をはじめとする既存の政治機構との軋轢や摩擦を生じている。

こうした動きとともに、近年社会科学分野の研究において、従来の理論的枠組みやその根底にある歴史経験を相対化する動きが生じている。例えば近代化の前提としての啓蒙思想や国民国家の歴史を、旧植民地の経験やジェンダー、マイノリティの視点から捉え直す動きはそうした流れの一部であるといえる。また地域研究の発展は、多様な歴史経験を示すとともに、従来の理論や概念の再考を促している。

上述の概況をふまえ、本論文では近年の社会科学における社会変動に関わる議論を検証し、特に地域性に照らした概念形成や理論構築の重要性とともに方法論としての比較研究の意義を論じ、今後の研究アプローチのあり方と課題を考察する。

II. 社会変動論の概況と問題の所在

社会科学分野において政治、社会変動の理解は常に学問の中心的課題であった。例えば K. マルクス (Karl Marx) は、生産関係を中心とする社会構造的側面から政治体制の変化を説明し、M. ウェーバー (Max Weber) は、人々の主体的な営為やその背景にある倫理的基盤を中心に資本主義の発展を説明している。社会変動に関わる議論は、上述の著者らに代表される思想的伝統を引き継ぎながら、往々にしてその議論を対立

* 社会科学研究所研究員 (社会科学科非常勤講師)

的に捉える事で政治体制や社会状況の変化を説明してきた。例えば革命や民主化を経済発展やそれに伴う社会階層間の関係の変化といった構造的な側面から説明するアプローチがある一方で、政治体制の変化に積極的に貢献したとされる社会層の行動やその思想を分析の対象とすることで、より主体的な側面から説明する議論がその代表的な例である。

こうした状況に加え、近年社会変動論を見直す様々な動きがある。具体的には地域研究の発展とともに、分析対象の地域固有の事情を理解し、社会変動の多様性を認識するとともに、従来の社会変動をめぐる議論が一部の地域の分析を中心に発達したことに対する自省から理論の再構築の必要性が議論されている。例えば民主化や産業化の過程には地域固有の事情を考慮すべきで、多様な経路があるといった議論はこうした議論の代表例である。またこのように個別の地域事情を理解するなか、社会変動には多様な説明要因が考えられうるという認識の高まりとともに、従来の理論の射程範囲を再検討する必要があるという議論も生まれている。加えて従来の社会変動論が政治体制の刷新といった劇的な変化の前後を捉えるのに対し、より長期的な視点で通時的な変化を分析する必要性や、上述のような社会構造対主体といった二者択一的な視点ではなく、より多面的な視点で包括的に社会の変容を分析する必要性が議論されている。こうした概況をふまえ、次項以下では近年の社会変動論に関わる代表的な議論にふれつつ、上述の問題群が社会科学の方法論の問題とどのように関わっているか議論する。

Ⅲ. 社会変動論の地域的多様性

1. 西欧地域の事例

社会科学分野において数多くの政治、社会変動論が展開するなかで、個別の事例の歴史性、地域事情をふまえたうえで理論構築を行う必要性を議論した代表的な論者がC. ティリー (Charles Tilly) である。ティリーは、社会学分野において静態的に社会を捉えようとする傾向を批判し、長期的な視点で社会の変化を捉える必要性を議論している。また単線的な近代化論や全体主義的なシステム論は、個別の地域事情を捨象するゆえ、政治社会変動の過程に多様なパターンがあることを説明し得ないと批判しており、社会科学が自らに課してきた理論化に対しても、慎重な姿勢を示している。例えば国家の興亡や民主化という現象一つをとっても、その過程は様々であり、固有

の状況や偶発性に留意しながら、因果関係も含めて個々の事象を理解しつつ、複数の事例の比較を通じ、社会変動の要因を特定化する試みを行っている。ただし一事例で生じた因果関係が、必ずしも他の事例で同様に生じるわけではないとしており、他事例への安易な応用や一般化に対しては警鐘を鳴らしている。⁽¹⁾

また従来の社会変動論は、ある一定の条件を満たすことで社会政治変動が起これると説明していたが、同著者は、そうした必要十分条件的な説明では多様性を説明しえないとし、政治社会変動の多様なパターンを特定の変数に指標化する試みを行っている。同著者は、資本 (Capital)、強制力 (Coercion) という二つの変数から欧州地域の国家形態の多様性の説明を試みており、例えば 14-15 世紀の北イタリアのジェノヴァ、フィレンツェなどに代表される都市国家や重商主義時代のオランダでは資本が商工業者など一部の社会層に集中する一方、政治的な支配力の程度は比較的低い「資本集約 (Capital Intensive) 型」とし、18 世紀のプロイセンやロシアなどは、いわゆる強権的国家の代表例であり、政治的支配力の集中度が高い「強制力集約 (Coercion Intensive) 型」とし、19 世紀以降の英仏は、資本の集中と強制力が相互に結びついた「資本—強制力集中 (capitalized coercion) 型」の国家であるとしている。その後、西欧地域では資本主義経済の発展ならびに軍事競争とともに国家の一形態としての国民国家が制度化し、各国家が「資本—強制力集中型」モデルに集約していったと説明しており、同地域内の国家の多様性とその歴史の変遷を、政治力学的視点と経済的視点から示す試みを行っている。⁽²⁾

上述の両概念は他地域の分析の際にも使用されており、比較分析を行う上で有用な概念とされているが、両概念の地域性と応用性は、社会科学における概念構築および実証研究の根幹に関わる問題を示唆している。ティリー自身も指摘するように、欧州の歴史経験は、国家システムを制度化し、その後規範としての国際秩序が構築されていった状況を理解するという意味では重要であるが、他地域における国家の興亡の歴史を分析する際には、どのようなメカニズムが作用しているのか、地域個別の事情そのものから見ていく必要があるといえる。その意味でヨーロッパの歴史経験を政治、社会変動のモデルとして他地域の分析にそのまま応用することには異議を唱えており、上述の両概念を用いる際には、あくまで分析対象地域の経験に照らした上で両概念を再定義すべきであるといえる。

ティリーが示した問題提起は、その方法論も含めて社会科学分野で様々な形で議論され、また多くの実証研究が行われるなかで多様な展開が見られる。⁽³⁾ 次項以下では

上述の問題提起を受け、非西欧地域の事例の分析を通じ、どのように政治体制や社会状況の変化が議論されているか見ていくことにする。

2. 「非西欧地域」の事例

上述の議論を受け、多くの研究者によって世界諸地域の分析を通じて従来の西欧の歴史経験に照らした政治社会変動に関わる概念や理論に対して異なるモデルを提示する試みがなされている。例えば K. バーキー (Karen Barkey) は、17 世紀のオットーマン・トルコ帝国を事例に、西欧諸国とは異なる国家支配体制の展開を示している。同時代の西欧諸国の多くは、政府が各地方勢力の弱体化をはかるなかで中央集権化を推進させていくというあり方が一般的であったのに対し、トルコ帝国の場合には中央政府が地域の特定の社会集団に依拠しつつ支配強化を推進していったという点において、異なる中央集権化のパターンを示しているというのが同著者の論点である。詳述すると、同帝国においては、帝国拡大期に中央政府が常備軍を強大化し、その過程で地方農民層が傭兵化していったが、こうした社会層は軍役終了後も各地方で非正規の武装集団として残存し、影響力を強めていった。その後、同帝国政府が支配体制を強化するにあたり、各地域の民間武装勢力の既得権益の維持、拡大を確約することで、政権への協力体制を確立していったとしている。また同著者はトルコ帝国の特殊性を示すだけでなく、中国諸王朝との類似点を挙げ、帝国という政治体制そのものが、上述のような中央政府と地方の政治勢力の関係を規定するとして、従来西欧の近代国民国家の歴史経験を規範として議論してきた国家概念や政治社会体制に関わる議論に対しても、新たな光を投射している。⁽⁴⁾

また R. B. ウォン (R. Bin Wong) も、西欧と比較しつつ中国諸王朝の特徴を分析しているが、その際比較分析の方法論を議論している。同著者によると、従来の比較地域分析においては、西欧地域の経験を規範モデルとして扱うことで、非西欧地域は西欧地域と比較される際にその差異が強調され、その異質性ゆえに西欧モデルからの逸脱と結論づけられる傾向にあり、地域の固有な歴史状況をふまえた理論の発展に結びつきにくい傾向にあったとしている。加えて非西欧地域の分析には、欧米諸国の影響力など地政学的な視点も盛り込む必要があることも指摘している。こうした点をふまえ、地域固有の経験に拘束されない、より中立的な概念を提示したうえで、国家体制のあり方を国際環境と統治対象地域内の支配層と社会集団の関係なども含めて分析を行う必要があるとしている。⁽⁵⁾

こうした方法論的な議論をふまえて行った同著者の分析によると、時代によって相違はあるものの、中国諸王朝の各政権に対する対外的及び国内の社会集団からの脅威や、軍勢力等の示威程度は相対的に低く、またそのことが王朝交代の構造的原因となっていたと説明している。また対外面では東アジア地域内における地域秩序を積極的に構築し、国内的には広範な社会層の統合をはかることで政権を維持していたが、こうした政治力学的な説明要因に加えて、政治体制の思想的基盤としての華夷思想や儒教思想などにも言及している。また経済的には懐柔的政策をとりつつも、思想や教育面で社会統制を行うなど、統治対象の社会全般に対する高い関与度を指摘している。加えて、漢王朝時代からの徴税制、常備軍、官僚機構や教育制度等の存在を指摘することで、西欧の近代国家の諸制度を規範とするような発展論的な図式による近代化論に異議を唱え、個別の地域事情およびその変遷を捉えていく必要性を論じている。

上述の著者らの研究は、既存の西欧の歴史経験に基づいて発展した国家諸制度に関わる理解に異論を示し、分析対象の地域の独自性を示すと同時に、国家支配形態の多様性を示すことで、既存の国家概念や国家興亡に関わる議論の再考を迫ったといえる。換言すれば西欧地域以外の地域で発展した多様な国家体制の分析を通じて、支配機構の一形態、一制度としての「国民国家」の地域性、歴史性を反転させる形で示したとも言える。近年、こうした研究が活発化しており、社会科学全体のなかでもこのような多様性を理解する必要性が共有化されつつある。

Ⅳ. 社会変動論と比較地域分析

1. 地域概念の多様化と分節化

地域研究の活発化に伴い、既存の概念や理論構築のあり方を再考する動きが生じているなか、その研究アプローチ自体は多様化している。上述の著者らの研究が、分析対象の地域や時代を広範に設定し、巨視的な視点で地域分析を行っているのに対して、より微視的な視点で、一国内の一地域のみに焦点をあてて分析を行った研究の代表例として P. ヘラー (Patrick Heller) の研究があげられる。ヘラーはインド南西部のケララ州における民主化の過程を、工場労働者および農業従事者の組織化の過程として描き、西欧の諸地域が辿ったような民主化、つまり商工業者などを中心とする中間層が自らの発言力を強めて市民社会を構築していく過程とは異なる状況を示し、民主化の地域的多様性を提示しているが、同時に同地域の特殊性を指摘することで、個別地

域の経験を安易に同国内外の他地域に一般化することに対する懸念を示している。こうした問題意識から分析対象をあえて一国内一地域に限定することによって、民主化の過程におけるダイナミズムを地域の事情に照らして理解する必要性を促している。⁽⁶⁾

一方で地域性を強調し、一つの分析単位として定型化を図った研究としては M. マムダニ (Mahmood Mamdani) の研究があげられる。マムダニは、アフリカ地域の歴史経験、具体的には植民地経験や人種隔離政策に代表されるような社会支配体制をアフリカの共通経験として捉え、同時にこうした経験は欧米地域との比較類推 (Analogy) ではなく、独自に取り扱うべきであると主張している。マムダニの主張の根底にあるのは、従来の社会科学における特定の地域に偏向した歴史経験による理論化や、そうしたなかで生まれた近代化論的な議論が地域研究分野において趨勢を占めてきた状況に対する異議であり、地域独自の歴史事情に照らして分析を行うべきであるという議論である。実際、マムダニが指摘するようにアフリカの多くの地域における「国家」とは植民地体制下において成立したもので、独立後もその内部における分断や階層化は制度化すると同時に対立軸となり、政治体制の再編や紛争の構造的原因となっている。そしてこのような経験そのものが、前述のような欧州の歴史経験に照らした国家概念の枠組みでは説明しえないとして、アフリカ地域の共有経験を一つの分析単位 (Unit of Analysis) として捉えるべきであるという議論にいたるわけだが、一方で広範な領域をアフリカという一地域に括することで、その内部における個別事情を看過することも懸念される。この問題に対し、マムダニ自身はアフリカ地域内の複数の国家を比較し、各国の差異を類型化しながら、地域限定的な概念モデルを提示することを試みているが、同地域では国家そのものが、宗教集団や部族集団、インフォーマルセクターと並ぶ社会の一構成単位に過ぎない位置づけであるという指摘もあり、その意味で当該地域の国家単位の比較分析の有効性には更なる議論が必要である。⁽⁷⁾

先述のマムダニの研究は、歴史、地理的に近接な関係にある地域の比較を行うことで、その相違を明確化し、社会変動の構造的原因を特定化するという手法をとっており、その方法論に関しては未だ議論が尽きないが、近年このようなアプローチをとる研究が漸増している。F. ロペズ＝アルベス (Fernando López-Alves) は、ラテンアメリカ地域内 5 カ国の政治変動の分析を行い、植民地化、その後の独立、さらにはその後の内戦という共通の歴史経験をふまえて各国の民主化の過程や内容の相違の説明を試みており、地方住民の組織化が、社会階層間の関係および軍事機構の再編を促

し、民主化の過程に影響を与えたことを指摘している。同研究の根底にある方法論は、民主化の経過やその構造的要因を比較分析を通じて示すという B. ムーア（Barrington Moore）の研究を踏襲しているが、以下の点においてはムーアの議論を再検証し、比較分析の方法としてはより緻密な分析を試みている。すなわちムーアの研究は英、仏、独、日、露という地理的にも隔たりのある事例の比較分析を行っているが、同著者の研究では地理的に近接である点に加え、植民地化という共通の歴史経験が地域経済や社会階層間の関係にも反映されている点など、社会構造的にも類似した事例を比較することで、各事例の相違点が浮き彫りになるという点が挙げられる。⁽⁸⁾

2. 比較地域分析の方法と課題

上述の著者らの研究は「地域」への分析アプローチにはそれぞれ違いがあるものの、既存の地域研究が西欧の経験を規範としながら分析を行っていたのに対し、地域の個別事情をふまえた上で概念や理論の再構成を試みているのが特徴である。従ってこれらの議論は、従来の社会科学における理論構成のあり方が、一部の地域の歴史経験に偏向していたことに対する異議を示すという意味では、近年の社会科学分野における議論と相俟って、多くの示唆を投げかけている。一方で「西洋（Western）」、「非西洋（Non-Western）」といった分類や「西欧（Western Europe）」、「アジア（Asia）」などの地域概念に関してはその歴史性も含めて厳密な議論が必要である。例えば「西欧」地域においても上述のティリーが示したような多様性が存在し、また上述のウォンが分析対象とした「中国（China）」地域においても、同著者自身も認めるように、時期によって政治、社会状況に大きな変化が見受けられ、一地域として括り、特徴を議論することによって個別の事情が捨象されることもありうる。つまり上述の議論の多くは、既存の概念構成や理論化に対する批判という意味では非常に明快な議論を提示しているものの、一方で地域概念を固定化し、その特徴の抽出化を試みることによって、全体主義的な議論に陥る可能性もあり、分析対象の地域や時間軸を個別に言及し、設定する必要があるといえる。また政治、地理的に近接な国家間ならびに地域間の比較分析は、分析方法のあり方として有用な分析方法と考えられるが、一方で分析対象地域の地域枠や比較分析単位を設定する際には、その妥当性の議論が不可欠であるといえる。また旧植民地体制の宗主国と被支配地域の歴史を視野に入れた研究なども生まれつつあるが、一方で国家間関係などの国際関係的視点をどのように分析に取り込むのかという課題も残されている。

こうした議論に加え、近年地域研究のなかで、社会科学としての理論的貢献を目指す動きが活発化している。また社会科学全般においても地域固有の事情に照らした理解が求められるなか、社会科学が自らの拠り所としてきた一般化、理論化をどのように考えていくかという問題が浮上している。

こうした状況をふまえ、地域性、歴史性に配慮しつつ、包括的な分析を促している議論の代表例としては D. マッカダム (Doug McAdam)、S. タロウ (Sidney Tarrow)、C. ティリー (Charles Tilly) らによる研究が挙げられる。従来の政治変動論では、戦争、革命、社会運動といった政治変動の一局面に注目した研究が中心であったが、彼らはより包括的に政治社会変動を捉え、そのメカニズムを理解することを目指しており、また世界諸地域の多様な事例を取り上げることで、概念および理論の修正をはかろうとしている。特に個別の地域事情や歴史背景をふまえて理解すべきとしたうえで、異なる事例でも見られる共通の現象や過程を比較分析しながら政治社会変動のメカニズムを捉えることを指向している。⁽⁹⁾

各地域の個別性、歴史事情をふまえながら理論化を目指すという彼らの基本的な姿勢は、今後の社会科学の研究のひとつの方向性を示したものであるといえる。つまり上述の議論は社会科学ひいては社会学内部における概念や理論の定型化によって非歴史的な存在として社会を捉える傾向に対しては異議を唱え、また個別の経験の分析の中で、どのように理論化をはかっていくかという社会科学の命題に対しては、比較参照や通時的な視点による分析を通じて、反復される現象が起こりうる条件や共通項を理解し、原因を特定化するなかで理論化への道筋を探るというもので、社会変動論の研究手法として一つのモデルを示している。こうした方法による研究は、分析対象地域の地域固有性を確認するとどまらず、社会科学における基礎的な概念の再構成や理論の再構築を指向するもので、民主化や産業化といった政治社会変動の過程や原因の多様性を示すと同時に、多様な個々の経験が他地域の経験の説明にどの程度有用かという一般化の命題に対しては、限定的な状況下で反復されうる因果律を導き出すなかで理論構築を行うことで、社会科学の実証的姿勢を堅持するものといえる。社会科学分野では今後も上述のような通時的な視点を備えつつ、地域比較分析を通じて理論化をはかっていくアプローチが一つの潮流になっていくと考えられる。

V. 社会変動論の今後の展望

上述の状況をふまえ、社会変動論の今後を議論すると、より包括的かつ多面的な分析が求められると同時に、理論化に関しては地域的多様性と射程範囲の限定性を意識した上で行う必要があるといえる。つまり、概念構成の前提にある歴史経験をふまえ、他地域の分析に応用する際には、分析対象の地域性、歴史的特殊事情を十分に考慮し、概念としての有効性や妥当性を議論し、また分析を通じて概念を再定義する必要があるといえる。

その意味で地域研究は、個別の地域事情、歴史経験に照らした概念の再構成や理論化をはかることで従来の社会科学における概念や理論構築に再考を促していると同時に、今後どのような方法論を提示していくか、社会科学との関係も含めて問われている。また社会科学の方法論に関しては、より個別の地域事情、歴史経験に即して、限定的な理論構築を行い、比較分析を通じて、その理論を検証していくというあり方が一つの潮流であるといえる。また分析視角を複次化させることで、より多面的に事象を捉えていく傾向は今後も強まると考えられる。総括すると、実証研究を重ねるなかで理論構築を行うという社会科学の基本的姿勢は堅持しつつも、その応用性に関わる問題や多様性に対する敏感さが求められており、このことは、今後の社会科学の研究のあり方を議論する上でも重要だといえる。我々が実際に研究を行う際にも、どのような概念、理論構築を想定していくのか、その射程範囲も含めて、改めて明示した上で分析を行っていく必要があり、またどういった理論構築のあり方が望ましいのかといった点に関してもさらに議論を重ねていくことが今後の課題といえよう。

注

- (1) ティリーは比較を通じて一般化しうる「因果メカニズム (Causal Mechanism)」の抽出や類型化によって帰納的に理論を導いていく「歴史過程分析 (Historical Process Analysis)」を提案している。ティリーの方法論に関する議論は以下を参照。Tilly, 1985a, 1997, 1999b, 2001.
- (2) Tilly, 1990.
- (3) ティリーが提示した「資本」、「強制力」概念を他地域の分析に応用した研究例として、以下の著者らの研究が挙げられる。Ikegami and Tilly, 1994; White, 1995; Ota, 2003.
- (4) Barkey, 1994.
- (5) ウォンは国家の支配形態を示す指標として、国際環境および社会集団との関係など、統治者に対する脅威 (Challenge)、軍事、行政面における能力 (Capacities)、政治支配を遂行し、正当化する上での主張 (Claim)、また統治対象への関与 (Commitments) という四点において、西欧との相違点にふれつつ、中国諸王朝の独自性を議論している。Wong, 1997.
- (6) Heller, 1999.
- (7) Mamdani, 1996. ミグダルは国家が社会の一組織に過ぎない地域もあり、その地域性ととともに国家概念を相対的に捉えなおす必要があると議論している。同著者の議論の詳細については以下の文献を参照。Migdal, 1988, 2001.
- (8) López-Alves, 2000; Moore, 1996. 上述の著者に加え、ページ (Jeffery M. Paige) もまた中南米地域における多様な政治変動の経験を示している。詳細は以下の文献を参照。Paige, 1997.
- (9) McAdam, Tarrow, and Tilly, 2001.

参考文献

- Barkey, Karen. 1994. *Bandits and Bureaucrats: The Ottoman Route to State Centralization*. Ithaca: Cornell University Press.
- Heller, Patrick. 1999. *The Labor of Development: Workers and the Transformation of Capitalism in Kerala, India*. Ithaca: Cornell University.
- Ikegami, Eiko and Charles Tilly. 1994. "State Formation and Contention in Japan and France." James L. McClain, John M. Merriman, and Ugawa Kaoru, eds. *Edo and Paris: Urban Life and the State in Early Modern Era*, Ithaca: Cornell University Press, pp. 429-454.
- López-Alves, Fernando. 2000. *State Formation and Democracy in Latin America, 1810-1900*. Durham: Duke University Press.
- Mamdani, Mahmood. 1996. *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*. Princeton: Princeton University Press.

- McAdam, Doug, Sidney Tarrow, and Charles Tilly. 2001. *Dynamics of Contention*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Migdal, Joel S. 2001. *State in Society: Studying How States and Societies Transform and Constitute One Another*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 1988. *Strong Societies and Weak States: State-Society Relations and State Capabilities in the Third World*. Princeton: Princeton University Press.
- Moore, Barrington, Jr. 1966. *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*. Boston: Beacon Press.
- Ota, Ariko. 2003. "Porcelain and Power: Merchandising Policies in Tokugawa Japan, 1800-1870." Ph.D. dissertation, Columbia University.
- Paige, Jeffery M. 1997. *Coffee and Power: Revolution and the Rise of Democracy in Central America*. Cambridge: Harvard University Press.
- Skocpol, Theda. 1985. "Bringing the State Back In: Strategies of Analysis in Current Research." Peter Evans, Dietrich Rueschemeyer, and Theda Skocpol eds., *Bringing the State Back In*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 3-37.
- _____. 1979. *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tilly, Charles. 2001. "Historical Sociology." *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences*, New York: Pergamon Press.
- _____. 1999a. "Epilogue: Now Where?" George Steinmetz ed., *State/Culture*, Ithaca: Cornell University Press, pp. 407-419.
- _____. 1999b. "Processes and Mechanisms of Democratization," Working Paper.
- _____. 1997. "Means and Ends of Comparison in Macrosociology." *Comparative Social Research*, Vol. 16, 47-57.
- _____. 1990. *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1992*. Cambridge: Basil Blackwell.
- _____. 1985a. *Big Structures, Large Processes, Huge Comparisons*. New York: Russell Sage Foundation.
- _____. 1985b. "War Making and State Making as Organized Crime." Peter Evans, Dietrich Rueschemeyer, and Theda Skocpol, eds., *Bringing the State Back In*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 169-191.
- _____. 1975. "Western State Making and Theories of Political Transformation." Charles Tilly, ed., *The Formation of National States in Western Europe*, Princeton: Princeton University Press, pp. 601-638.
- White, James. 1995. *Ikki: Social Conflict and Political Protest in Early Modern Japan*. Ithaca: Cornell University Press.
- Wong, R. Bin. 1997. *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience*. Ithaca: Cornell University Press.

**Social Dynamics in Global Perspective:
Issues and Approaches for Comparative Analysis in Social Sciences**

<Abstract>

Ariko Ota

This paper discusses theorization of social change in social sciences by giving a critical review of the recent discussions in the disciplines. It specifically refers to the recent studies that discuss historicity of the major concepts and theories on political and social changes through analysis of experiences that previous studies had not paid much attention. These studies suggest that it would be necessary to revise these concepts and theories through analysis of specific experiences. As some scholars seek out for possibility of theorization through comparison of the cases to identify common ground among the cases, the author of this paper argues the significance of comparative analysis for revising these concepts and having better theories based on historical and regional oriented analysis. While recognizing some of the challenges within regional analysis, the author discusses the significance of framing each case with specific temporal and geographic frame and specifying the realm of generalization. The paper also discusses the recent trends in the discipline that analyze social phenomena by looking at multiple dimensions. With an awareness of regional diversity as well as complexity of social phenomena, social scientists need to develop diachronic and multiple perspectives to analyze social dynamics while keeping their tasks for theorization.